R3.11/29 朝日村農業ビジョン検討会（第３回） 会議録　1／8

開催日	令和３年 11 月 29 日	時間	13：30～ 15:30	場所	役場大会議室
会　議	朝日村農業ビジョン検討会（第３回）				
内　容	・朝日村農業ビジョン素案について				
出席者	別紙名簿のとおり（欠席者：上條典泰）				

あいさつ(小林村長)

世の中ではラニーニャ現象、エルニーニョ現象というような言葉があって、どうも今年はラニーニャ現象がもう始まっていて、冬はいつもの年より寒いということのようです。そんな報道もある中で、農業も今シーズン終わりということで冬支度が済んでいる方もおられるかと思いますが、忙しいところ今日集まりいただきましてありがとうございます。いよいよ農業ビジョンという形で素案を作りましたので、この素案が、私たちが 10 年 20 年 30 年後の目指している農業に合致しているかという点を皆さんで十分検討いただきたいというふうに思います。いずれにしましても、主幹産業が農業である朝日村は、ずっと農業で生きていかなくちゃいけない部分がありますので、よろしくお願いいたします。

協議事項

(１)朝日村農業ビジョン素案について(清水係長　説明)

農業ビジョン素案に対する意見交換

清沢正彦委員

誰もがチャレンジできるというのは、村民全体のことを示していると思うのですが、理想が高いのはすごくいいと思う反面、非常に理想が高すぎるような気がします。農業人であればチャレンジできるけど、農業人でなければチャレンジできないものがあって、その人たちがチャレンジするための何かがビジョンの中に準備されているかと言うと少し抜けがあるのかなと思いました。村民の皆さんにお示ししたときに、「私は無理だ」というふうなイメージを捉えてしまう可能性が強いのではと思います。農家の方のためだけのビジョンではないと思いますので、村として具体的に何をどのようにやっていくのかということまで具体的に示すことも大切なのでは。

中村守一委員

持続的に発展するということを考えていった時に、今、私たちの弱さというものがどこにあるかと思いまして、今はコロナで話合いの場というのが非常になくなってきて、みんなで討論してみんなで何かやろうということがなかなか出来ないような状況であります。そこでざっくばらんに意見を出すということが無くて、ただ一変とおりの組織のあり方でずっときているような現状から、そういう討論の場というのが今まで多々あったということを改めて感じています。

地域の中でどのように話合いの場を設けるかはわかりませんが、何を作るだとか、みんなでまとまって何かをしようといった意見の吸い上げを、そのような話し合いの中でしていかないといけません。目標を掲げてもなかなか難しいというのが目に見えていることなので、本当にその場所を作るということ自体から始めないと大変かなというふうに思っています。

二茅克仁委員

理念は、大体ぼんやりした感じでもいいと思います。これから、新規就農者の目標であったり、何年までにどのくらいというような具体的な数値等を示してもらうと分かりやすいですし、そこに向かっていけると思いました。

清沢課長

はい、今日お諮りした施策について、最終的には、二茅さんがおっしゃっていただいた通り具体的な目標値については示していきたいと思います。

上條惣一郎委員

この施策は PDCA サイクルにかけて評価すると思うんですけれど、その時にちゃんと評価ができる、できないという観点で、これは合致するのかしないのかというふうにしていけばいいと思うんです。頭に「10 年後には」などをつけて、最後に「これを完了しました」というように考えていくと、これって 10 年後に完了できるかどうか、どういう手法をもってできるかどうかを考えて、無理なものは削ればいいと思いますし、現実的なものだけ残していけばいいと思います。里親制度の周知は 10 年後の完了ができそうだとなれば、こう意識をつけようという目標を作ってく、たぶんこれでＯＫだと思うんですよ。

また、農業用施設関係などの毎年やらなくてはいけないようなものは、やることが当たり前だと思うので、特にここで示す必要はないのかなと思います。

なので、施策例の先に具体的にこういうことで評価もしようというのはこれからついてくると思うんですけど、そういったところで必要なものを全部洗い出せばいいのかなと思います。

清沢課長

最終的に、10 年後 20 年後 30 年後にどうするのかというのはお示しする予定です。本日はそういったものはお示ししていませんので、今お示ししている中で、できるもの、できないものもあればご意見をいただきたいと思っております。10 年後 20 年後を見据えた時に、もっとこういったことがあるだろうというような、私たちでは考えられない部分のご意見があればいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

農地と人の集積と部分については、資料にもあるとおり、「人・農地プランの実質化」において、地域の話合いの場を持たなければなりません。集積が進んでいないわけではないんですが、10 年後には認定農業者が半分になる予定です。そうすると、本当にその人たちだけに集積ができるかどうかというのは非常に難しい面が出てくると思うので、そのところも含めての話し合いを、この 10 年間ぐらいずっとしながら進めていきたいということで「人・農地プランの実質

化」というような言葉で書いてございます。

それから、上條委員から意見いただいたように、定期的にやるものとかも載っているんですが、そういった所も少しでもやらないでいるとまた止まってしまいますし、特に畑地かんがい施設の更新という部分については、本当に村の農業をやるには、もしかしたら10数年後には全部やり直さなくてはいけないということも考えると、当然計画の中に置いておかないといけない部分がありますので、一応こういった項目で出させていただいて、話し合いの場を持ちながらやっていきたいと思っています。

清沢美智穂委員

私は加工品に興味があって、リンゴジュースと人参でリンゴとにんじんジュースとか、にんじんジャムを作ったりしています。今うちではビーツを作っていまして、リンゴとビーツでもジュースを作ってみようかなと思っています。やってみようというような思いはありますが、ここには施設がないものですから、私はいつも今井の恵の里に委託して作ってもらっていますし、売るところがないので、今はファミリーマートで少し扱ってもらっています。しかし数が出るものじゃないので、コロナが落ち着いたら、試食会みたいなものを通じて加工品を広めていきたいなというのはあります。

朝日村にも加工所がありますよね。農家の方が今は動かしていますが、農家の方も忙しいので使っても１ヶ月くらいです。加工所を作るのであれば、恵の里のように１年中動かせる加工所を作っていただきたいです。

経営に関してですが、やはり年を取ってくるとあんまり働けなくなるじゃないですか。若い人ばかりじゃなくて、お年寄りにも何か支援みたいなのが欲しいなと思います。

特色ある農産物の発掘に関しては、ソルガムなんかはどうかと思うんですね。今、小麦アレルギーの方がいっぱい居ますので、小麦に変わる作物ということで、パンにして米粉と合わせて使うと柔らかくなります。長野の方では、信大と連携してソルガムについて研究しているそうです。ソルガムは、粉にして雑穀にもなりますし、木はバイオエネルギーにもなったり、この菌床になったものをバイオエネルギーとして使えるらしいので、今後検討してみてはと思いました。

中村守一委員

6次産業化の中では、やはり販路というのが１番難しいんですよね。作っても売れないという現実を私もずっと見てきています。ですから本当に、清沢委員が言ったように通年施設が利用できるということが１番重要になるし、まずはやはり、ジュースにしたり、乾燥させて粉にしてお茶にするとか、いろんな形での事業を考えていく必要があると思います。例えば、個人で利用することから始まって、これはいいなということでみんなに広まって、どんなものでもチャレンジして研究していくことを通じて、SDGs にもあるように食品ロスを無くしていく必要があると思っています。

自然災害についてですが、当たり外れはあろうかと思いますけれど、きちんと講師に来ていただいて、ＣＯ２や地球温暖化、こういう現状から来年はこんなような予測になりそうだとい

う意見を聞いた中で、自分でその気象を活かして農業をしていくというようなこともあったらいいのではと思います。

清沢正彦委員

私はいったん田舎を離れてまた帰ってきたんですが、グループワークの中にブランド力という言葉があります。当時の仕事柄調味料を扱っていまして、長野県野菜だとやはり洗馬などの産地にお願いしているんですけれど、朝日と聞いて誰もピンとこない現状を考えると、実際ブランド力というのは思っているほどあるのだろうか、というのを今感じています。

経営の方ですと、清沢委員が言われたように、やはり加工品ですよね。加工所などの施設とかを村に一緒になって整備していただいて、一緒に販売していくなどをしないと、申し訳ないですが野菜だけで朝日村というイメージをもっている人は少ないと思います。ブランド力を高めるためには加工品も含めて、そういった物の整備等をしていかないと、ブランド力の向上と販路拡大、朝日村のＰＲ、この辺は基盤としてやらないと経営も成り立たないし、魅力ある農業も自らがＰＲして、品揃えも含め朝日村の特徴をもっと作り出しておく必要があるかなと感じました。

二茅克仁委員

自分は加工所を作るというのは良い意見ではないと思っていて、それに税金をかけて課題が解消できるかというのはまた別の問題だと思うんです。例えば、てらすふぁーむの日本酒は酒造が担っているじゃないですか。加工をやりたい人がいるなら、原料になる生産物と委託業者をリストアップして委託できるところを紹介してもらえるようにして、アポを取りやすい環境や窓口を作ってもらえると気軽に始められると思いますし、色々なところに広がるんじゃないかなと思います。

清沢課長

加工所については、村に特産がないとよく言われるんです。そういう施設で何かができればありがたいと思うのですが、税金を使って建てるものなので、実際問題は、本当に一年中やれる人がいないと同じことの繰り返しになってしまいます。本当にやれる人やりたい人が居るのかというので、しっかり確認をした中で検討をしていくことになるかと思います。

また、現在ファミマの一部に野菜を置いてある部分しか直売施設がないので、観光客が来た時に、野菜販売の拠点があって、そこに行けばいつでも朝日村産の野菜が買えるような環境があればいいなとは思っております。

清澤元就委員

細かい部分はいろいろありますが、これで進めてもらえばいいと思います。

先日、私はびっくりするようなことがありまして、次代を担う子どもへの食料困難ということがありますが、それに関連して、村の教育大綱の原案がこの間出されたということで新聞で見ました。その中で、小学校 5、6 年生の鉢盛中学校の朝日村の生徒 200 人くらいにアンケー

トをとったら、その中の 90%以上は農業に肯定的で、あとの数パーセントの子どもたちは農業に愛着がない、農業以外のことを取り入れてほしいという意見が出たということで非常にショックを受けました。これから農業者が減少するということは確実です。後継者がいないとか、収入面で会社を辞めてまで農業をやる人はいないと、今の小学生中学生が考えているとなると非常に悲しいです。10 年先 20 年先 30 年先について計画を立てる上で、そこをどこかと連携を取って研究していただきたいと思います。

あとは、概ねこれで結構です。

武田修委員

村の問題として、担い手や荒廃地についてなど、これから色々考えていかないといけない課題を柱にしていただければと思います。

圃場整備にしても、良い農作物ができにくいというような課題もありますので、ご対応お願いします。

島田ひとみ委員

全体を通して、ぜひ取り入れてもらいたいなと思うこととして、今の子どもたちはスーパーで買ったりとか、形のいいだけの野菜を食べることに慣れていると思うのですが、村としても、畑で出荷できないような野菜を「もったいない野菜の特売日」というような形でやっていただいたり、農家に余っているお米があれば格安で食べられる何か、というような、命をいただくこと対する愛着心なんかを未来の子どもたちに繋げていけたらと感じます。

SNS などネットを活用して、村にそういういいところがあることや、なにか取り組んでいるということから魅力を感じ、人口増にも繋がってくるのではないかと思います。

下田直美委員

今、お 2 人の方が子どもの教育の関係でお話しされましたが、そのことを基本目標の 1 番「担い手の育成」の項目に入れた方がいいと思いました。

あと、農業用設備の整備と維持の中の、防災重点ため池の適正な維持管理について、これはどういうことでしょうか。

清沢課長

防災重点ため池については、今まで農業用施設として使ってきた経過がありますので、それを本当に使うなら、しっかり施設を整備して適正に使っていくというような一つの例として挙げさせていただきました。

中村守一委員

新規就農者の設備に対する補助等ということでありますけれど、やはり新規就農者には 1000 万、2000 万と非常に大きな投資が必要だということで大変だと思いますので、リース事業もしっかり取り組んでほしいというふうに思います。私も小さな農家でやっているので、機

械をは揃えるのは非常に難しいということもあります。村の方で、何かそこに参入できるような方向での事業というのを取り入れてもらった方がいいんじゃないかという風に思っています。

上條靖志委員

全体的にはいいと思うんですが、まず基本目標の２番、農業所得の向上ですけれど、あまりにも多いのではと感じました。販路の拡大の所にブランドの向上とかを一緒にできそうな気もしますし、多様な経営スタイルのところに自然への対応も入れられるんじゃないかと思いますし、自然への対応ということで言うと、次の頁の環境の変化に対応した農業に共通するところがあるんじゃないかと思いました。それと、今までやってきているものもありますし、これから新しくやるものもあると思うんですが、色分けして村民に示すような形もあるかと思いました。

清沢課長

項目の整理については確認させてもらって、また次回お示しします。色分けについては、新しい部分は当然村民にも周知したいと思っていますので、わかりやすく表現したいと思っています。

青柳みよこ委員

全体的にはすごく素晴らしいと思いました。お話を聞いていて、朝日村に行ってここに行けば朝日村のものが買えるという場所があると、村としてＰＲもできるし、ブランド化といった面でもそういった場所ができるといいなと思いました。

やはり 10 年後 20 年後を考えると、子どもたちへの教育というのは大事じゃないかなと思います。

太田和美委員

新規就農者への設備投資に対することですが、先ほど中村委員さんもお話しされたとおり、うちはおじいさんから受け継いだもので田畑を耕しているのですが、それでもやはり必要な農機が出てきて、親戚からトラクターを借りてきてやっていたりすることもありますので、新規就農者でもそういう機械の使いまわしじゃないけれど、みんなで貸し借りしてできる基地があれば、機械も抱え込まずにいいと思います。メンテナンスにもとてもお金がかかりますし。

里親制度の周知推進とあるんですが、主人も何年か前は里親になっていましたが、朝日村の葉洋菜にこの制度を使って研修に来る方が一人もいなかったです。やはりこの朝日村の葉洋菜には大変だとか、重いなどのイメージがあるらしく、主人はこの里親制度の更新をやめました。

家族経営協定ですが、私も以前家族経営協定のことを学ばせていただいて、主人に話したところ全然興味も示してくれなかったです。今、主人の右手も左手にもなってないかもしれないですけれど、私なりに一応主人ができないことをしているつもりです。しかしなかなかこの家族経営協定を結んで私の意見を取り入れてくれるとかは無くて、奥さんなくして成り立たない

農業だと思いますので、やはり講座なんかを通して旦那さんの意識を変えることで私たちの地位も上がりますし、それを見ている子ども達もちょっと考え方が変わってくるんじゃないかとも思います。

それと、うちにはほ場整備事業に当たる田んぼがあります。やはりほ場整備をしたからといってちゃんとしたものができるまでに多くの投資が必要です。ただ使いやすいように道路をまっすぐにしました、真四角にしましたと言っても手放したい人も多いらしいです。そこまでお金をかけてやる意味があるのかと思ってしまいます。なので、そういうことを理解するための勉強会も必要だと思います。合わせて、実際誰が手放したいと思っているのかなど、村でもたくさん情報発信をしてほしいです。

曽根原加奈子委員

先ほどお話があったブランド力について、うちの娘は松本の学校に通っていますが、美味しくないと言って 5 月までのレタスしか食べないんです。でも何かしてもらったお礼に松本の子にあげたりすると、その子はおいしいと言うんですよね。どの時期が美味しいとか分かる部分はあると思うんですが、鮮度が違うと思うんです。

私の実家は名古屋ですけれど、実家に帰っても洗馬産のレタスの箱は見るんですが、信濃朝日は 1 回しか見たことがありません。やはり流通先は取り合いで決まっていると思うので仕方がないところもあると思いますが、自分が育てたものが実際どこに行っているのかわかりません。そのブランド力を上げるには流通先がどこなのかというのは考えながらやっていった方がいいのかなと思いました。

生分解性マルチですが、うちの畑の近くで使われていて、ロータリーしてあるのはいいんですが、あれって土の中に入らないと分解しないらしく出ているものがすごく落ちているんです。結局それは土に入らないとただのゴミです。その辺りが生分解性マルチを推奨するにあたって懸念されるのかなと思いました。

全体的には、すごく壮大な基本方針に思えてしまって、ほんとに実現性があるのかないのか、パッと見ほんとにこれできるのかなあと夢っぽく感じていしまいました。

清沢課長

マルチについても 1 つの事例として示してみましたけれど、またこれも農協さんや色々な業者の方にお話を確認しながら進めていきたいと思います、

実効性についても、次回までにまたいろいろ意見を聞きながら、「いつまでに何ができるか」ということを示していきたいと思います。

＜農村支援センターから＞

農村支援センター小林補佐

全体から申し上げますと、県としても食と農業農村振興計画というとても大きな計画を作ってありまして、それを農家の方に示すと、ポイントがよく分からないという話が出て、あまり細かいところまで突き詰めるとなかなか強制化できないかなという中で、今回、相当皆様から

出してもらった意見を吸い上げて、課題や意見の意識統一の中で集約された計画かなと思っています。計画の中ではある程度大枠での表現となってしまいますが、県としても、例えばこの地域に来るとなにか有機農業の産物が手に入るよ、というようなものがあるとすれば、そういう産地化に向けてのことや、機械や技術に対して支援も検討している部分が多々ございますので、引き続きこの計画に対して全面的に協力させてもらいながら、各農家さんが稼げる産地になれるようにしたいと思っています。

葉洋菜に対するイメージというのは、稼げる一方で、労働的にとても大変なところがある中で、やはり稼げる事例をたくさん作り魅力発信も必要だと思いますし、協力させていただきたいと思います。

農村支援センター穂谷主任

私たちも勉強させてもらえるような、現場の声を頂きました、ありがとうございました。村としても皆さんの貴重な意見を踏まえて今後計画を作って行かれると思うんですけれど、私が思ったのは、条件不利地における作物研究です。これはやはりどこにでも課題としてあるかと思いますが、とはいえやはり収益性がないと実際的には進んでいかないのが現実かと思います。土壌的なものや、あるいは気候的なものがございまして、やはりできるものとできないものがあると思います。そういうのも含めて盛り込んでいく必要があると思います。

それと、子どもさんのお話ありましたが、これは大変重要なことだと思います。ある市町村でも、高齢化が進み将来心配だというようなところがございます。やはり後継者が勤めてしまうというのが実態である状況です。朝日村さんにおかれましても、いろいろと意見が出された中で、親御さんが将来の農業に関して心配されているという事例もあったかと思うんですが、外部から確保するのも良いかと思うんですけれど、基本的に朝日村さんは代々親元就農が主だと思いますので、その辺りを一応把握しておく必要もあるんじゃないかというふうに感じております。合わせて教育的なもので体験させていくというものが必要になってくるかと思います。

それと、所得の向上維持では、例えば自然への対応の中で冬季の農業について研究というようなことで、加工というふうにも結びついていくと思います。加工施設の研究や 6 次産業化の研究というようなことがあるかと思いますが、関連して販路の開拓等も通信販売等の仕組みを考えてみるのもいいのかと思いました。

<u>その他</u>

次回の検討会は令和 4 年 1 月 18 日(火)13：30　予定

以上